



一貫コース通信

想像力と言うヒトだけに与えられた力の偉大さを

“光陰矢の如し”とはよく言ったもので、時間の流れは留まってくれない。今年も半年が終わり、10日前には夏至も過ぎてしまった。これを境に実際には日照時間が短くなるのだが、暑さも手伝ってか実感は伴わない。そんな煩雑な日々の濁流の最中、23日に『国際理解講演会』で永遠瑠・マリールーズさんの講演を拝聴出来る機会を得た。四半世紀前に大きな国際問題だったルワンダの内戦を体験したルーズさんの切実なる訴えは、総ての面で生徒諸君の想像を越えて居たに違いない。生徒諸君の時間が一瞬静止したか、それとも、現実の事なのか夢の中の出来事なのかの判断に困ったヒトも居た様に思う。口にするまでもないが、歴史を振り返れば、戦争が齎す悲惨さ残酷さは枚挙にいとまがない。戦争は人なら誰もが持っている内に秘める負の側面が起こす現実で、自分だけが例外と言う事は絶対にない。幸い、我が国は戦争や紛争等には半世紀以上関わらなかつただけの事である。もしかしたら、この感覚を自分とは切り離し、紛争地の人だけのものと思っているヒトが居るかも知れないが、それは間違った考え方だ。現在、コロナ禍は一定の落ち着きを見せて来ているが、それと置き変わりウクライナの状況がメディアの主流を占める中で、その現実と結びつけ想像したヒトも多かったに違いない。【想像から実感へ】

ところで、動物の中でヒトに最も近い種はチンパンジーで在る事は多くのヒトの知る所である。ヒトゲノム解析の結論により、この近種と人類の遺伝子の差異は意外にも1.6%に留まる事が証明された。京都大学類人猿研究所の研究に因ると、チンパンジーの世界はほぼミーファーストであるらしい。自分と相手、そして食欲等の目の前の毎日の世界が総てを成しているのだと言う。勿論、繁殖期にはホルモンの分泌で性欲も増すが、私達ヒトの日常性の欠片(かけら)は殆ど見られないのだと言う。この事はジェーン・グールドの著書『森の妖精』にも綴られている。私達ヒトは自分と他者は勿論、現在以外にも過去や未来へ思考を巡らせる事ができる。また、実際には存在しないモノへも思いを馳せる事ができる。この営みが言葉を生み、文化・文明を創造したのだろうが、巡り巡って、現在目前に広がる世界は、先人が頭に描いた想像の世界なのかも知れないのだ。【想像から現実に】

思うに、想像力を身に着ける大切さに異論を挟む余地は無い。しかし、そうは言われても、この力を身に着けるとなると実際には容易ではない。身近な創造力の持ち主ともなると過去の偉人(例えばレオナルド・ダヴィンチ等)を思い浮かべるが、彼等も想像力を発揮する前に豊富な知識を身に着ける過程の在った事が証明されている。つまり、彼らにもやがては創造のエッセンスに成る知識や技術を習得する時期が在ったのだ。思うに、地道な繰り返しこそが、創造力の母(原点)なのだ。もう、動物園に行かなくなって久しいが、お猿さんを思い浮かべれば一目瞭然、その姿には努力も反芻の力も見られはしないですものね！

